

定年後の豊かなデュアルライフを求めて (茨城県つくば市)



17人の有志が集まって耕している菜園



デュアルライフを楽しむ川又さんご夫妻



良質な土から新鮮なマトが毎年収穫される

都会に住むリタイアメント世代で、老後の楽しみとして家庭菜園程度の農業を楽しみたいと思っている人は多い。茨城県つくば市に住む川又洋二さんもそのひとりだ。川又さんは現在でもマーケティングコンサルタントの仕事をしなが、奥さんの実家のあるつくば市で相続した農地を活用して、仲間と一緒に本格的な菜園を楽しんでいる。

17人の有志が集まって菜園をやることになったのが8年前。メンバーはみな知り合いで、つくば研究学園の研究所に勤めている研究者や、スーパーマーケットのOB、カメラマンや編集者、コピーライターなどさまざま。川又さんをはじめ農業未経験者がほとんどで、土作りから勉強した。幸い近くに「茨城 BM 自然塾」というところがあり、そこで安全で良質な土作りを学ぶ。ここでは、自然界の微生物（バクテリア）とミネラルの力を借りて、家畜の糞尿などを有機微生物に発酵させた堆肥を基に、良質な農産物をつくる技術を研究している。

「猫の額のような坪数での耕作ですから、連作障害が起きやすいのですが、土作りのおかげか、同じ場所で同じ作物が毎年収穫できました」

川又さんたちがこうした菜園づくりに挑戦するのには理由がある。つくばエクスプレスの沿線開発で周辺の宅地化が進み、世代交代で休耕地が増加していることだ。

「ご覧のとおり休耕地の持ち主はみな兼業農家で、何も作らず年に数回雑草を刈るだけです。ひどい場合は強い除草剤を撒いて、雑草すら生えなくなってしまう。そうなると土地がダメになり、耕作地に戻すことが難しくなります。こうした休耕地をうまく活用できないかというのがきっかけでした」

その後、川又さんたちは農地活用のさまざまな方法を模索する。高齢化や兼業農家で遊休地化している土地をなんとかできないか。そんなとき出会ったのが、ロシアの「ダーチャ」と呼ばれる、政府が土地を借り上げて耕作したい人に貸す市民農園の方式だった。このダーチャを参考に自分たちでモデルケースを作ってみようということになったのだ。

現在、2反歩の土地のうち300坪を区画割りして、メンバーがそれぞれ自由に使える菜園にし、残りの300坪を17人全員で耕す共同畑にしている。昨年、みなが集まって語れる場として20坪の家を建てた。ここは農作業のあと、夕日を眺めながら採りたての野菜を肴にゆっくりと酒を酌み交わす憩いの場でもある。

川又さんたちの建てた家は農家住宅という扱いだが、納屋風の別荘といえる少々贅沢なものになっている。ラウベ（宿泊小屋）型や農作業小屋として経費を工夫すれば、実際の農家でも小屋付き貸し農園スタイルで十分に採算がとれるのではないかと考えている。東京に家があるが、ここにも家庭菜園を楽しめる別荘がある、というデュアルライフ（2住居生活）を求める団塊の世代に向けたメニューがつかれないか。都心暮らしと田舎暮らしの両方を満喫する暮らし方。特に借り手としては、各市町村で実施しているクラインガルテンで5年間の利用経験を積み、さらに、農家の指導を得ながら、より本格的に農作物作りに挑戦したいという人を想定しているという。

「東京から1時間以内が理想。ダーチャを研究すると、人気があり、長続きしているのはモスクワから1時間以内にあるダーチャなんです。現在ある市民農園は山梨県や長野県など遠すぎます。このつくばは時間的にも最適だと思いますよ。現在の農地法では、農地のまま菜園付き別荘（農作業小屋）を造るには解決しなければならぬ問題が残りますが、セイタカアワダチソウの雑草畑より、非農家住民と一緒にあって農地保全に挑戦してみたいですね」と川又さん。

都市周辺の農地で、家族経営の農家もっている遊休地を、ロシア式ダーチャでうまく活用できれば、なにか変化が起こるのではないかと川又さんは期待している。

解説：「ダーチャ」とは、ロシアの菜園付き別荘（小屋）のこと。食料不足のおり、政策的に農業とは別の職業をもつ人々に無償で農地を与え、自らのための食料を生産することを目的につくられた。現在は、自給自足とレジャーを兼ねた生活スタイルとして定着。手作りの小屋は、農作業をする場だけでなく、別荘として家族や仲間とのスローフードを楽しむ場となっている。